

文学における近世：タームとメソッド

—読本における俗語的表現を視点として—

周 以 量

はじめに：中日における近世

近世というのは、日本では江戸時代を指す。これは広く一般に知られているし、タームとして自明の言葉のようである。これを英語に訳すと、modern age (近代) あるいはpre-modern age (前近代) になるのである^①。同じ漢字を使う中国では、近世というのは字面の意味で「近き世」ということになる^②。しかし、果たして近世という言葉は中国で時代の一区区分としての意味を持たないかというところ、そうではないようである。日本側の例を取ってみると、例えば、内藤湖南 (1866-1934年) は『支那近世史』^③において、近世を歴史的な区画のひとつとしている。内藤は「近世には、ただ年数から云つて今の時代に近いといふばかりではなくして、必ず近世を形成する内容がなくてはならぬ」^④という。そこで、近世を形成する内容はいったいなんであるかについて、内藤は、

- (1) 貴族政治の廢頽と君主独裁政治の代興
- (2) 君主の位置の変化
- (3) 君主の権力の確立
- (4) 人民の位置の変化
- (5) 官吏登用法の変化
- (6) 朋党の性質の変化
- (7) 経済上の変化
- (8) 文化の性質の変化^⑤

という政治・経済・法律・文化などの説明を通して、宋を含めた時代以後を近

世としているのである。この宋代近世説は後に宮崎市定（1901－1995年）によって受け継がれ、深められていった^⑥。

一方、中国では近世を宋代以後とする説はあまり説かれていないけれども、まったくないというわけではない。例えば、胡適（1891－1962年）は『中国哲学史大綱（上巻）』^⑦で、「インド系のもは中国系のものに加わってから、中国の中古の哲学をなす。近代インド系の勢力は次第に衰えてから、儒家が復帰して、ついに中国の近世的哲学が生まれたのであって、宋・元・明・清を経て、今日に至った」^⑧と言っている。そして、「中国哲学史の区分で」、中国哲学史を古代・中世・近世と三つの時代にわけ、近世を宋・元・明・清の時代としているのである^⑨。ほとんど同じ時期に中国と日本の学者はともに近世という時代区分を使って、宋・元・明・清を指しているのである。その後、近世という時代区分は中国であまり使われていないし、指す時代も必ずしも同じではないけれども、つい最近中国で出版された陳来氏の『中国近世思想史研究』という著書で、宋・元・明・清を近世とする見方が示されている^⑩。

文学における近世

歴史学的に見ると、近世というタームは日本では江戸時代を指す。中国では宋・元・明・清を指すこともあるが、しかし、日本においても、中国においても、宋・元・明・清を近世とする説は必ずしも異論のない説ではない^⑪。ただし、文学的に見れば、日本の江戸時代の文学を近世文学とするように、中国の宋・元・明・清の時代の文学を近世文学とすることも妥当のように思われる。前述した『支那近世史』において、内藤湖南は中国の近世的な文化の内容について、学術・文学・芸術の面から明瞭に論じられている。近世的な文学については内藤は次のように述べられている。

文学の中でも、文は六朝以来唐まで、駢体文（四六文）とて対句を使つた文が流行したが、唐の中頃から韓柳諸家が起り、所謂古文体を復興し、

凡ての文が散文体になつて来た。即ち形式的の文が自由な表現法の文に變つて来た。詩の方では、六朝から唐初までは、五言の詩で対句の多い選体即ち文選風のものが盛んであつたが、盛唐の頃からその風一變し、李杜以下の大家が出て、益々従来の形式を破ることにつとめ、七言歌行とて自由な長い形の詩が多くなつた。而して詩文ともに、唐より宋に至るに従つて、益々形式より内容を尊ぶやうになり、自由な体裁を取るに至つた。四六文を作るにも、その風が唐以前とは異なつて、形式的な言葉の中に、意味の流動する形をとることを好むやうになつて来た。唐末からは、又詩の外に詩余即ち詞が発達して来て、五言・七言の形式を破り、頗る自由な形式に変化し、音楽的に特に完全に発達してきた。この頃から已に平話、今日の白話即ち口語の小説が起つて来たが、宋代より元代にかけて、曲の発達を來たし、従来の短い形式の叙情的のものから、複雑な形式の劇となつて来た。その詞なども、典故ある古語を主とせずして、俗語を以て自由に表現するやうに變つた。これがために、一時は貴族的の文学が一變して庶民的のものにならんとした。要するに文学に於ても、貴族的形式的なものから平民的に自由なものに變つて行つたのである。^⑫

韻文と散文に分けて論じており、簡単でありながら、要を得ているといえる。要するに、近世に入ってから、韻文はともかくとして、散文のほうで、白話の文学すなわち口語で書かれた作品あるいは俗語の目立つ作品が多くなり、まさに庶民的な文学の盛んな時代に入ったといえる。この点から見ると、宋から清までの文学を近世文学としてまとめて考えるのは理にかなっているように思われる。言ってみれば、中国の近世文学は庶民の文学的精神が高揚する時代の文学であり、とくに叙事文学（epic）のほうで、方法的には白話（口語）を使うことが特徴である。

一方、日本では、近世は物語（narrative）の盛んな時代で、仮名草子、浮世草子、読本、洒落本、滑稽本、人情本、草双紙などの叙事的文芸（epic）が江

戸の文壇に相次いで登場するのである。つまり、近世に入って、新しい文芸が現れることによって、中国の近世文学で、「話本」などのタームが現れたのと同じように、新たに仮名草子などのようなタームが生まれた。今回は、中国の近世文学と最も関係の深い読本というタームを取り上げて、その中国小説の白話（俗語）的表現を考えてみたいと思う。

読本における俗語

読本といえば、都賀庭鐘という名前はまず思い起こされる。彼は若い頃から中国語と白話小説に興味を持ったらしく、白話文学の研究、翻訳そして翻案を試みたのである。¹³ その翻案の第一作である『英草紙』は寛延二年（1749年）に刊行されて、読本の最初の作ともされている。九篇からなっており、その典拠はすべて中国の白話小説に求められるといわれている。九篇でそれぞれ翻案の態度は違うけれども、作者の白話（口語・俗語）に対する知識は物語に盛り込んでいることは随所見られる。今回の報告で第二篇の「馬場求馬妻を沈めて樋口が婿と成る話」（以下「馬場求馬」と略し、翻案とも称したりする）を取り上げてみることにする。

「馬場求馬」は中国の白話小説『古今小説』（または『今古奇観』）¹⁴にある「金玉奴棒打薄情郎」（以下「金玉奴」と略し、あるいは原話と称す）を翻案したと指摘されている。¹⁵ 原話は「話本」であるから、俗語を使うのは当たり前である。たくさんの俗語を使う白話小説を翻案するに際して、都賀庭鐘は次の三つの方法で対処しているように思われる。

- 一、原話にある俗語をそのまま利用する。
- 二、原話にない俗語を利用する。
- 三、俗語の形や意味を変更して利用する。

それぞれの方法を具体的な用例を通してみることにする。

一、原話にある俗語をそのまま利用する

「馬場求馬」は「金玉奴」の翻案であるから、原話にある俗語を使うのは当然といえば当然といえよう。そこで、「馬場求馬」に使われている原話にもある俗語をピックアップすると、次のようなものがあげられると思う。

乞丐（こつがい）、志気（しき）、入贅（にふぜい・いりむこ）、婚娶（こんじう）、事々称懐（じじおもひにかなふ）、喜酒（きしゆ）、一斉（いつせい）、賢慧（けんけい・かしこくさとし）、悪念（あくねん）、終身（しゆうしん）、水手（すいしゆ）、心高（こころたかし）、依允（したがふ）、納聘（ゆひいれををさむ）、一堆（いつたい・ひとかたまり）、嬌声宛転（けうせいゑんでん・わかきこゑさへづるがごとく）、賢婿（けんしよ・むこどの）、薄情（はくじやう・まことなき）、羞慚（さざん・はづかしさ）、輕慢（かろし）、面皮（めんぴ）、和好（くわかう）、奉養（ほうやう）、送終（をはりをおくる）¹⁶

これらの俗語は「馬場求馬」に原話のそのまま利用されている。二つの用例だけ取り上げてみる。

1、喜酒

喜酒は、喜ばしいことがあったときに飲むお酒のことで、特に、婚礼の祝い酒という場合が多い。「馬場求馬」では次のような場面が描かれている。

1-A) 浄応、器量ある婿取りたりと悦び、席をはらうて、饗応を催し、近隣の往来する人家、又は求馬が日頃の朋友を招請して、交る交る六七日の亭主をぞなしける。一族の巧頭、当小二郎、此の由を聞きて大にねたみ憤り、彼と我とは一類にて、彼も元は巧頭也。彼が家に婿を取らば、我も一盃の喜酒に預るべきに、婚儀なりてすでに一月、饗応又六七日、尚一寸

の招状を送らず。

ここの喜酒は明らかに婚礼の祝い酒という意味で使われている。これは原話の、

1-B) 到了滿月，金老大備下盛席，教女婿請他同學會友飲酒，榮耀自家門戶。一連吃了六七日酒，何期惱了族人金癩子。那癩子也是一班正理，他道：“你也是團頭，我也是團頭，只你多做了幾代，掙得錢鈔在手。論起祖宗一脈，彼此無二。侄女玉奴招婿，也該請我吃杯喜酒。如今請人做滿月，開宴六七日，並無三寸長，一寸闊的請帖兒到我。

という部分の翻案であることは一目瞭然である。「喜酒」も原話にあるのをそのまま利用している。この言葉は俗語として白話小説でよく目に付く。「三言二拍」からその用例を見ると、同じく『古今小説』では、例えば、

1-C) 這是牛郎織女的喜酒，勸你多吃幾杯，後日嫁個恩愛的老公，寸步不離。(第一卷 蔣興哥重會珍珠衫)

というような使い方があり、このほかに、

1-D) 又且山僻荒居，鄰舍罕有，誰人議論？老人家是必委曲成就，教你吃杯喜酒。(『警世通言』第二卷 莊子休鼓盆成大道)

1-E) 次日，鄰里斂財稱賀，一則新婚，二則新娘子家眷團圓，三則父子重逢，四則秦小官歸宗複姓，共是四重大喜，一連又吃了幾日喜酒。(『醒世恒言』第三卷 賣油郎獨佔花魁)

1-F) 拜了天地，吃了喜酒，衆人俱各散訖。(『初刻拍案驚奇』卷十六)

張溜兒熟布迷魂局 陸蕙娘立決到頭縁)

1-G) 娘子不如許下這段姻緣，又完了終身好事，又不失一時口信，帶挈老身也吃一杯喜酒。(『二刻拍案驚奇』卷二 小道人一著饒天下 女棋童兩局注終身)

と、祝いのお酒の意味で使われている。

同じような意味の言葉は、『英草紙』第四篇の「黒川源太主山に入ッて道を得たる話」では、

1-H) ……深谷、「さらば色を直して見せなん」と、上の小袖を脱ぎ去れば、下に色よき紅梅の絹をかさね、用意の酒肴を排べ、吉酒を酌みかはし、「去るべきえにしたにやあらん、よきころの夫婦也」と一人言しつづ、……

というように、「吉酒」を使っている。

「吉酒」とは、新編全集本では、『名物六帖』にある「吉席 シウゲンノザシキ」を引き合いにして、祝言の酒と解釈されている。「吉酒」は中国語としてあまり使われていない言葉であるが、同じ意味の言葉として、「喜酒」を使う。体裁の面で『名物六帖』によく似ている『応氏六帖』に、「喜酒」という俗語が収録され、「メタイサケ」と読み、用例として、「喫定親喜酒」をあげている¹⁷⁾ 明和九年(1772年)の刊行で、釈頭常(大典禪師)撰の『学語編』に「喜酒」が出ており、「イワイノサケ」と読んでいる¹⁸⁾ また、天明二年(1782年)の序と自跋を持つ山崎元軌撰の『中夏俗語藪』にも同じような言葉と説明が見られる¹⁹⁾

ちなみに、『(画引)小説字彙』に「喜筵」という項目があり、「ヨロコヒサカモリ」との解釈が載っている²⁰⁾ つまり「喜筵」は「喜酒」とほとんど同じ意

味で使われているということである。これも白話小説よく見られる俗語で、「喜酒」のお酒に視点を置くのと異なり、むしろ結婚披露宴を指す。やはり「三言二拍」から用例を引いてみる。

1-I) 白娘子取出銀兩，央王主人辦備喜筵，二人拜堂結親。（『警世通言』第二十八卷 白娘子永鎮雷峰塔）

ここの「喜筵」は「吉席」と同じ意味を持っている²¹⁾。

1-J) 常見人家要省事時，還借這病來見喜，何況我家吉期送已多日，親戚都下了貼兒請吃喜筵，如今忽地換了日子，他們不道你家不肯，必認做我們討媳婦不起。（『醒世恒言』第八卷 喬太守亂點鴛鴦譜）

ここの「喜筵」は「喜酒」に変えても差し支えまい。

2、面皮

「面皮」は面の皮、つまり顔の意味である。原話では、

2-A) 莫稽漲得面皮紅紫，只是離席謝罪。

というようになっている。

『古今小説』にこの言葉はまたいくつか出ている。例えば、

2-B) 可是白淨面皮，沒有須，左手長指甲的麼？（第一卷 蔣興哥重會珍珠衫）

2-C) 假公子剛剛謝得個“打攪”二字，面皮都急得通紅了。（第二卷 陳

禦史巧勘金釵鈿)

2-D) 五戒聽了此言，心中一時解悟，面皮紅一回，青一回，便轉身辭回臥房。(第三十卷 明悟禪師趕五戒)

2-E) 從來陰性吝嗇，一文割捨不得。剝盡老公面皮，惡斷朋友親戚。(第三十九卷 汪信之一死救全家)

2-E) は面目の意味に転じているが、その他の例はすべて面の皮の意味を持つ。

原話は「紅」のあとに「紫」をつけ、「紅」を強調して、主人公である莫稽のひどく恥じることを読者に伝えるために、「面皮紅紫」としている。顔を赤くするという表現は中国の白話小説(話本)でただ「紅」(赤い)というのは稀のようで、必ずほかの表現を添えて使う。これは説話人(講釈師)が言葉で聴衆に深い印象を与えるために常に使う言い方で、白話小説に流れ込んだように思われる。2-C) や2-D) の「(面皮) 通紅」や「(面皮) 紅一回、青一回」はそのような言い方であるが、顔が「紅紫」というような言い方はほかにも見られる。例えば、

2-F) 廣明見房門失鎖，已自心驚；又見鄭生有些倉惶氣質，面上顏色紅紫；再眼瞞去，小木魚還在帳鉤上搖動未定，曉得事體露了。(『初刻拍案驚奇』卷二十六 奪風情村婦捐軀 假天語幕僚斷獄)

というような例がある。ところが、「馬場求馬」では、

2-G) 馬場我が心中に深く恥ちて、面皮を紅めて、ひたすら尚罪を謝し、夫婦打ち連れて宿所にかへりぬ。

ほとんど原話をそのまま訳すような表現であるが、「紅紫」をただ「紅める」というだけで、語気を強める「紫」を省略している。しかし、原話の「紅紫」に含まれている「ひどく恥じる」の意味を省略しておらず、「深く恥ぢて」というような表現にかえている。すなわち、翻案は原話のことばの深層にある意味を表面化しているということである。

『英草紙』第八篇「白水翁が売卜直言奇を示す話」にも「面皮」が使われ、

2-H) 使女是を見るより、大に叫んで地に倒れ、面皮黄に變じて起き上らず。

という。これも原話の「三現身包竜凶断冤」（『警世通言』第十三卷）に基づいて、原話にある「面皮」をそのまま利用している²²。ただ、ここで左訓として、「かほいろ」と読ませている。

以上見てきた「喜酒」と「面皮」はともに原話に使われている俗語で、『英草紙』はそのまま取り入れて用いたのである。

二、原話にない俗語の使用

原話にある俗語のほかに、「馬場求馬」には原話に使われていない俗語の利用もしばしば見られる。四例を見てみる。

3、賞錢

「馬場求馬」では、

3-A) 顔に袂をおほひ、舟方共に賞錢をあたへければ、皆々聞かねども、其の心をさとりて、誰か再び此の事を問ひ定めず。

とあって、ほとんど原話の

3-B) 卻將三兩銀子，賞與舟人爲酒錢。舟人會意，誰敢開口？

の翻案である。原話では、「賞与酒錢」といい、「賞錢」というのはその略した言い方のように、作者が新しい言葉を作り出したようであるが、実はそうではない。「賞錢」というのは俗語で、白話小説によく見かける言葉であり、ご褒美として与えたお金、という意味である。

この俗語は原話の「金玉奴」には出ていないけれども、「三言二拍」に多く使われており、『古今小説』だけでは、21回にもものぼる。その他に、『警世通言』では12回で、『醒世恒言』では6回で、『初刻拍案驚奇』では6回で、『二刻拍案驚奇』では9回で、合計54回使われている。さらに範囲を広げて、例えば、『水滸伝』を紐解くと、この言葉はよく用いられていることがわかる²³。白話小説にこれほど「賞錢」という言葉が多く使われているだけに、庭鐘は原話の「賞与酒錢」を書き換えなくても、十分「賞錢」という俗語²⁴を身につけることができると思える²⁵。

4、親迎

「親迎」という言葉は、中国でかなり古い時代から使われている。『詩経・大雅・大明』に、

4-A) 大邦有子，俔天之妹，文定厥祥，親迎於渭。²⁶

とある。「親迎」は古代の婚礼の「六礼」²⁷のひとつで、婿が自ら女の家へ行き、嫁を迎えて、「奠雁礼」（婿が嫁を迎えにいくとき、雁を差し上げる儀礼）を行う。それから、嫁を自分の家に連れて戻り、交拜（新郎新婦が互にお辞儀をすること）・合盃（婚礼のとき、新郎新婦が夕顔で作った杯を酌み交わす儀式）などの儀式を行うのである。つまり、「親迎」はもともと文字通り、自ら迎え

るという意味であるが、後には結婚の儀式として定まったのである。²⁸⁾

翻案の「馬場求馬」で「親迎」に「むこいり」の左訓がつけられ、新編全集本の頭注も、婿入りと解釈され、『公羊伝』の隠公二年の条の注で、「礼必ず親迎スル所以ノ者ハ、男ハ女ニ先ヅルヲ示ス所以也」を引いて説明されている。²⁹⁾

白話小説にその用例を見てみると、

4-B) 原來江南地方娶親，不行古時親迎之禮，都是女親家和阿舅自送上門。（『醒世恒言』第七卷 錢秀才錯占鳳凰儔）

4-C) 高贊爲選中了乘龍快婿，到處誇揚，今日定要女婿上門親迎，準備大開筵宴，遍請遠近親鄰吃喜酒。（同上）

4-D) 顏俊道：“出月初三，是愚兄畢姻之期，初二就要去親迎。原要勞賢弟一行，方才妥當。”錢青道：“前日代勞，不過泛然之事。今番親迎，是個大禮，豈是小弟代得的，這個斷然不可！”（同上）

といったような例が出ている。「三言二拍」における「親迎」の用例は12回あり、すべてが『醒世恒言』第七卷「錢秀才錯占鳳凰儔」に出ており、婿が嫁を迎えに行くという意味と婚儀という意味とを解する。婚儀としての「六礼」のいくつかは宋の時代にすでに廃れたようであるから、³⁰⁾ 4-B) の「昔の親迎の礼を行わず」というようなことが言われたのである。

5、売弄

「馬場求馬」では、

5-A) 馬場口中につぶやきて、「我に何の罪ありて、如此に翫弄するや。執権家の勢を売弄ふにあらずや。」

といい、そして「ふれまふ」と読ませている。中村幸彦は「振舞ふ」から転じた言葉と説明され、さらに『唐話類纂』に「売弄 ジマンズルコト」とあるのを指摘し、『照世盃』の「那一把扇子ヲ持つテ、売弄」を引いて解釈をしている。この言葉は「金玉奴」にはないけれど、自慢するという俗語として、白話小説によく使われている。例えば、『古今小説』に次のような用例が見られる。

5-B) 宋四公道：“那人好大膽！在你跟前賣弄得，也算有本事了。（第三十六卷 宋四公大鬧禁魂張）

このほかに、「売弄」は『警世通言』や『醒世恒言』や『初刻拍案驚奇』や『二刻拍案驚奇』にもたくさん出ている。

「売弄」は古く使われた言葉であるが、六朝以前は権力を手に入れ、勢力を求めようとする意味で使われ、俗語としては、自慢することで使われている³¹。享保十二年（1727年）刊の『授幼難字訓』では、「売弄」に、「メツタニジマンズル」という読みをつけたが、出典として、明の李翊の『俗呼小録』にある「諸人之自誇曰売弄」をあげている³²。

それから、「売弄」は自慢する、ひけらかすという意味のほかに、岡白駒の撰とされる『水滸伝訳解』では、「人ノコトヲソタテノボスモ売弄ト云」との説明をしている³³。

6、岳家

この言葉は『古今小説』には見出されないが、「馬場求馬」では、

6-A) 梅山が媒介によりて、期をえらみ、財帛をそなへて、聘を納む。婚姻の吉期にいたり、馬場親迎の儀を行ひ、岳家に至る。

6-B) 樋口曰ふ様、「賢婿常に岳家の卑賤を恨み、夫婦愛を失ふにいたる。……」

という。6-A) と6-B) に当たる原話は次のようである。

6-C) 此時司戸不比做秀才時節，一般用金花彩幣爲納聘之儀，選了吉期，皮松骨癢，整備做轉運使的女婿。

6-D) 許公又道：“賢婿常恨令岳翁卑賤，以致夫婦失愛，……”

原話（6-C）に比べて、翻案（6-A）のほうはかなり創作がなされているし、「岳家」を「がくか」と読ませて、左訓は「しゅうとのいへ」となっている。これに対して、翻案（6-B）は原話（6-D）に即した翻案で、「しゅう」との訓をつけている。（6-A）の「岳家」に対して、中村幸彦は、岳父（『類書纂要』に「妻ノ父」）の家、またはその人、との注釈を施されている。翻案（6-B）からわかるように、「岳家」は原話の「岳翁」に当たる。「岳家」も「岳翁」も妻の父、つまり「しゅうと」の意味で、共に白話小説に見られる言葉である。例えば、

6-E) 阮太始道：“老丈還記得雨中叩門，冒稱是岳家，老丈閉他在門外，不容登堂的事麼？”（『初刻拍案驚奇』卷十二 陶家翁大雨留賓 蔣震卿片言得婦）

6-F) 岳翁休要言而無信。（『警世通言』第十一卷 蘇知縣羅衫再合）

白話小説で、普通、「岳家」は「馬場求馬」のつけられた左訓のように、舅の家を意味するが、いうまでもなく、6-E) のように「岳翁」と同じ意味で使わ

れたりする。ただ、「岳翁」ほど多く見られないようである。「三言二拍」に限っていえば、「岳家」はただ3回使われたのに対して、「岳翁」は7回使われたのである。

明の陸嘘雲編の『(新刻徽郡原板諸書直音) 世事通考』では、「岳翁」について、称丈人也。泰山東岳在魯地、其山上有丈人峰、故称妻父曰岳翁、と解釈しているし、⁵⁴⁾ 中村幸彦が引用された『類書纂要』にも、妻の父と同じ意味を持つ言葉として、岳父・岳丈・丈人・婦翁・外父・岳公・岳翁を列挙している。⁵⁵⁾ 日本では、例えば、釈大典の『学語篇』に、「岳父」を「シュウトゴ」と読み、外舅ヲ称シテイフ、というふうの説明しているほか、また、同義語として、丈人・岳翁をあげている。⁵⁶⁾

翻案で、原話の「岳翁」ではなく、白話小説にあまり使われない「岳家」を使うのは、作者の俗語に対する理解が見て取れる。作者があえて参看した粉本を離れ、同じ意味のその他の言葉を選ぶのは庭鐘の言葉の遊戯かもしれない。

「馬場求馬」では、原話にない俗語を使っても、白話小説に見られる言葉なので、庭鐘の読書経験あるいは学識からごく自然のように思われる。

三、俗語を変えて使用する（言葉の変用）

『英草紙』で庭鐘は原話に使われていない俗語ばかりでなく、原話にある俗語を変化させて利用することもある。私はこの方法を仮に「言葉の変用」というふうと呼んでおく。ここで「常例銭」と「丐頭」を見てみたいと思う。

7、常例銭

「常例銭」というのは、慣例として送るまたはもらうお金のことです。「金玉奴」では、

7-A) 那團頭見成收些常例銭，一般在衆乞丐中放債盤利。

という。都賀庭鐘はこの言葉をそのまま使うのではなく、形を変えて利用している。

7-B) 多くの乞食より、毎月常例の役銭をとり納め、或は雨雪の頃、人の施なき時は、頭より粥を煮て養ひ、頭の門内に集り居て、草履草鞋を造りて例銭の便とす。

「毎月常例の役銭」というのは、毎月定まった額の税金のことである。「常例」という言葉は白話小説によく見られ、「三言二拍」から例をとると、

7-C) 若或泄漏風聲，必是汝等需索地方常例，詐害民財，吾若知之，必皆重責。（『警世通言』第四卷 拗相公飲恨半山堂）

7-D) 我寺中向來積下的錢財甚多，若肯悄悄地放我三四人回寺取來，禁牌的常例，自不必説，分外再送一百兩雪花！”（『醒世恒言』第三十九卷 汪大尹火焚寶蓮寺）

7-E) 正在思念流淚，那牢中人來索常例錢，油火錢，虧得縣宰曾分付過，不許難爲他，不致動手動腳，卻也言三語四，絮聒得不好聽。（『初刻拍案驚奇』第二十九卷：「通閨闈堅心燈火 鬧囹圄捷報旗鈴」）

7-F) 寄兒領了鑰匙，與沙三同到草房中。寄兒謝了沙三些常例媒錢。是夜就在草房中宿歇，依著道人念過五字真言百遍，倒翻身便睡。（『二刻拍案驚奇』卷十九 田舍翁時時經理 牧童兒夜夜尊榮）

7-G) 舊規但是老爹們來，只在省城住下，寫個諭帖來知會我們，開本花名冊子送來，秀才廩糧中扣出一個常例，一同送到，一件事就完了。（『二刻

というように、白話小説で、「常例錢」のほか、「常例」、「常例～錢」ともいう。岡白駒『水滸伝訳解』に、「常例錢」を、「コレシキ也。宋ノ末二見。多クアリシユヘ名目ニナリシソ」と解釈する³⁷⁾。『水滸伝』では、「常例」より「常例錢」のほうが多用しているから、『水滸伝訳解』では項目として出ているのである。また、『中夏俗語藪』にも「常例錢」があり、「日頭錢」と同じ意味であることを説明しており、「毎日ウハマイハネル」と解釈する³⁸⁾。「常例」も同じ意味であるが、7-F) の「常例媒錢」はそこから転じて、媒酌の労をとったため、もらうお金のことになる。「馬場求馬」の「常例の役錢」の使い方はこれに相通じている。

翻案に「例錢」という言葉も出ている。これは「常例錢」の略した言い方と見ていいのであろうが、しかし、白話小説に見えない言葉で、庭鐘の造語といってもいいと思う。つまり、「常例錢」という言葉から、庭鐘は「例錢」という新しい表現を作り出したのである。

8、丐頭

「馬場求馬」の冒頭のところに次のような文がある。

8-A) 然れども貧富は人の命なれば、此の城下といへども、乞丐甚だ多く、又乞丐を管領して、丐頭と称するものあり。

丐頭というのは、ここで明らかに乞丐を総轄する支配者で、いわゆる乞食のかしらである。原話には、「丐頭」という言葉はなく、「団頭」という言葉が出ている。

8-B) 話説故宋紹興年間、臨安雖然是個建都之地，富庶之鄉，其中乞丐

的、依然不少。那乞丐中有個爲頭的，名曰“團頭”，管著衆丐。

「團頭」は乞食を管理するおさであるが、翻案では、この俗語をそのまま使わず、ちょっと言葉を変えて「丐頭」にしたのである。中村幸彦は、「丐頭」という言葉は原話に「乞丐の團頭」とあるのを転じて用いられたかと推測されている。

「團頭」という俗語は「三言二拍」ではほとんど「金玉奴」に集中しており、ほかの篇にあまり多く見られない。しかし、宋の時代以来、俗語として使われている。それぞれ違った業種で、支配人のことを「團頭」という。³⁹『水滸伝』に現れた何九叔も「團頭」で、葬儀を行い、死者を埋葬する職業の頭、いわゆる葬儀屋である。

8-C) 王婆取了棺材，去請團頭何九叔。但是入殮用的，都買了；並家裏一應物件，也都買了。就叫了兩個和尚，晚些伴靈。多樣時，何九叔先撥幾個火家來整頓。(『水滸伝』第二十五回 王婆計啜西門慶 淫婦藥鳩武大郎)

清の時代の程穆衡という人が『水滸伝注略』という本を著して、『水滸伝』に出ている言葉を注釈している。「團頭」について、次のような注を施している。

8-D) 唐宋以民兵爲團，取團聚之義。有小團大團，十人爲火，五火爲團，此小團也。府兵以三百人爲團，此大團也，故有團練，團長等名。團頭者，一小團之頭。民間吉凶事，南方用丐頭，北方用團頭。⁴⁰

これに拠ると、「團頭」は民間で編成した五十人の軍隊組織の責任者で、民衆の中で何かいいことでも悪いことでも起きたら、南のほうでは「丐頭」が、北のほうでは「團頭」が赴いて片付ける、という。日本風に言うと、番太ということになるのであろうか。⁴¹それはともかくとして、ここで「丐頭」という言葉

が出てきて、「団頭」と同じ役目を割り当てられている。ただ「丐頭」は南のほうの言い方だ、という。

このような使い方は白話小説にまたいくつかあげられる。

8-E) 王酒便隨程五娘到褚堂作李團頭家，買了棺木，叫兩個火家來河下撈起屍首，盛於棺內，就在河岸邊存著。（『警世通言』第三十三卷 喬彥傑一妾破家）

8-F) 若是財利交關，自不必說。至於婚姻大事，兒女親情，有貪得富的，便是王公貴戚，自甘與團頭作對；有嫌著貧的，便是世家巨族，不得與甲長聯親。（『初刻拍案驚奇』卷二十 李克讓竟達空函 劉元普雙生貴子）

しかし、白話小説に「丐頭」の使い方は見られなく、やはり「金玉奴」に「この乞食の仲間にはかしらがいて、『団頭』と呼ばれ、乞食たちを取り仕切っていた（那丐戸中有個為頭的、名曰「団頭」、管著衆丐）」と言われたように、乞食のかしらという意味で「団頭」を使っていた。伊藤東涯（1670-1736年）の編になるといわれる『応氏六帖』に「団頭」の項目があり、「ヒニンカシラ」との傍訓をつけ、「委巷叢談、宋時杭丐者之長曰団頭、雖富而丐者之名不除」というように、明の田汝成（1503-1557年）『西湖遊覧志余』を引用して、解釈している⁴²。まさに、「金玉奴」に出ている「団頭」の説明である。それもそのはず、『西湖遊覧志余』を紐解いてみると、『応氏六帖』の引用文のあとに、「金玉奴」の話の種のような話が載っている⁴³。

また、『中夏俗語叢』に、「団頭」は乞食のかしらと解釈され、乞食の意味で、「丐子」・「花子」があげられている⁴⁴、『小説字彙』にも「団頭」が見え、「コジキノカシラナリ」といっている⁴⁵。

乞食のことは「丐子」・「花子」のほかにも、口語でまた「叫化」ともいう。例えば、

8-G) 一日傍晚，焦氏引著亞奴在門首閑立，見一個乞丐女兒，止有十數歲，在街上求討，聲音叫得十分慘切。有個鄰家老嫗對他說道：“這般時候，那個肯舍，不時回去罷！”那叫化女兒哭道……（『醒世恒言』第二十七卷李玉英獄中訟冤）

8-H) 聞得歹人拐人家小廝去，有擦瞎眼的，有斫掉腳的，千方百計擺佈壞了，裝做叫化的化錢。若不急急追尋，必然衙內遭了毒手。（『二刻拍案驚奇』卷五 襄敏公元宵失子 十三郎五歲朝天）

8-G) で「乞丐」と「叫化」と両方の使い方が出て、同じ意味を持っている⁴⁶⁾。実際、「金玉奴」(7-B) の文に続いて、次のように言っています。

8-I) 他靠此爲生，一時也不想改業。只是一件，團頭的名兒不好。隨你掙得有田有地，幾代發迹，終是個叫化頭兒，比不得平等百姓人家。

「團頭」も「叫化頭兒」も同じ意味で、乞食のかしらというのである。「馬場求馬」にある「丐頭」の言い方はこの「叫化頭兒」から出たのかもしれない⁴⁷⁾。

いずれにしても、庭鐘は白話小説にある俗語を利用しながら、俗語の形を変え、新たな意味を付したり、新しい言葉を作ったりしたのである。

おわりに：タームとメソッド

俗語をふんだんに使う小説は中国で近世に入って、市民社会の発展や印刷術の成熟および書坊の出現にともなってもてはやされた。話本はその代表的なもので、宋の時代、特に南宋時代になってますます数多く文壇に現れたのである。話本は「説話（スオホア）」——日本風にいうと講釈になる——の種本であるから、民間の俗語がたくさん使われている。文人が手を加えた——つまり知識

人によって純粋な読み物としての「擬話本」を創りあげた——あとも、口語体という性質はまったく変わっていない。

文学において、あるタームの成立にそれなりメソッドが潜められていると思う。白話小説というタームも例外ではない。その表現の方法に口語（俗語）というメソッドが抽出できる。白話小説というタームが成立する所以はその表現の仕方にある。言ってみれば、中国における近世の叙事的文芸（epic）の特徴は口語体にあるということができる。

中国の白話小説というタームと同じくして、読本というタームも近代に入ってから定着したそうである。⁴⁸『英草紙』は読本が生成する初めての作として、いろいろな面で後の読本の方法に影響を与えている。俗語表現について、以上見てきたように、『英草紙』では三つの面から分析できると思う。言い換えれば、『英草紙』における俗語表現に三つの方法が抽出できると思う。さらに広げていえば、読本に俗語の利用は多かれ少なかれこの三つの方法に従っているといえよう。今日、読本というタームを使うとき、少なくとも表現の面から見ると、必ず中国の白話（俗語）小説のイメージが伴うと言っているように思われる。あるいは読本というタームに必然的に白話小説のメソッドが付きまとうといえるかもしれない。すなわち、中国の俗語小説は方法的に読本というタームを生成するに役立っている。

以上見てきた「馬場求馬」の俗語的表現は修辞法（rhetoric）と見てよからう。直接原話にある俗語をそのまま使うのは明らかに原話の受容であるという種明かしのような方法だとすれば、原話にない俗語を使用するのは、都賀庭鐘が俗語に関する知識を披露し、ひいては中国白話小説にかかわる知識をひけらかすということができるかもしれないが、しかし、中国の俗語の変用はさらにそれを超えて、俗語あるいは白話小説に対する執着みたいなものが見え、読本の創作に駆り立てられたのだと思われる。読本における俗語の使用は読本の表現ないしは日本語の表現を豊かにし、読み手の言語的感覚が磨かれることとしたのである。

同じ近世文学という範囲で、中日それぞれに新しい表現を俗語という方法によって作り出したといえる。逆に言えば、俗語的表現は中日の近世文学というタームを成り立たせたメソッドのひとつだといえよう。

〔注〕

- ①例えば、『研究社新和英大辞典』（研究社、1974年）では、「近世」をmodern times [ages] と解釈している。
- ②例えば、『漢語大辞典（縮刷版）』（漢語大辞典出版社、1997年）では、「近世」について、①猶近代（近代に等しい）、②猶近乎世俗（世俗に近い）、というような説明をなされている。
- ③『内藤湖南全集（第十巻）』（筑摩書房、1969年）の「あとがき」によると、「中国近世史」は内藤が1920年と1925年に京都大学で行った講義を整理して、1947年に出されたのである。「中国近世史」との題で刊行されたのだが、講義の原題は「支那近世史」なので、『内藤湖南全集』に収めたとき、原題に復したのだ、という。
- ④「支那近世史」第一章・近世史の意味。『内藤湖南全集』（第十巻）、筑摩書房、1969年。
- ⑤同上。
- ⑥宮崎市定「アジア史論考（下）」、『東洋の近世』、教育タイムス社、1950年。
- ⑦胡適の『中国哲学史大綱（上巻）』は1919年の初版で、1931年に「万有文庫」に収められたとき、『中国古代哲学史』に改題された。
- ⑧胡適『中国哲学史大綱（上巻）』第一篇・導言。『中国哲学史大綱』、人民出版社、1996年。
- ⑨同上。
- ⑩陳来『中国近世思想史研究』、商務印書館、2003年。
- ⑪日本では、内藤湖南の宋代近世説に対して、宋代以降を中国史の中世とする説もある。そのきっかけを作ったのが前田直典の「東アジアに於ける古代の終末」（『歴史』1-4、1948年）という論文だそうである（『アジア歴史研究入門（第1巻、中国Ⅰ）』、同朋社、1985年再版）。中国では、近世というタームが熟されていないのは、近世という時代区分について定まった説はまだないということを象徴する。
- ⑫「支那近世史」第一章・近世史の意味。『内藤湖南全集』（第十巻）、筑摩書房、1969年。
- ⑬中村幸彦『英草紙』（新編日本古典文学全集）解説、小学館、1995年。以下『英草紙』の本文はすべてこの本に拠る。
- ⑭『古今小説』は明の馮夢竜（1574-1646年）の編纂で、初刻は天啓年間（1621-1628年）の天許齋という書肆から出されたのである。書名は『全像古今小説』というのであったが、後に『喻世明言』と改題されて再刊された。『警世通言』と『醒世恒言』とをあわせて、「三言」というようになったのである。一方、『今古奇観』は、正体不明の抱甕老人が編集したもので、四十編から成り、そのすべてが「三言二拍」から取ったのである。話の言葉遣いなどをやや改めて再編したのであるが、「三言二拍」の選集本としてよく読まれたのである。
- ⑮中村幸彦『英草紙』（新編日本古典文学全集）解説、小学館、1995年。
- ⑯中黒のあとの読みは左訓である。
- ⑰古典研究会編輯『唐話辞書類集』第十二集、汲古書院、1973年。長澤規矩也は解説において、中村

幸彦の説を引用して、『応氏六帖』は『名物六帖』のある時期の姿である、という。ここの「喜酒」の項目は、下集に収められた静嘉堂本に出ている。

⑱古典研究会編輯『唐話辞書類集』第十六集、汲古書院、1974年。

⑲同上。

⑳古典研究会編輯『唐話辞書類集』第十五集、汲古書院、1973年。

㉑「吉席」は、例えば、白話小説で、「這首詞名『賀新郎』、乃是宋時辛稼軒為人家新婚吉席而作。天下喜事、先説洞房花燭夜、最為熱鬧」（『二刻拍案驚奇』卷二十五 徐茶酒乘鬧劫新人 鄭蕊珠鳴冤完旧案）というように、祝言のことをいう。

㉒「三現身包竜圖断冤」の本文は、「嚇得迎兒大叫一声、匹然倒地、面皮黃、眼無光、唇口紫、指甲青、……」となっている。

㉓「水滸伝」百十二回本では、23回ぐらい出ている（「信賞錢」を含める）。穂積以貫（1692-1769年）編の『忠義水滸伝 [語解]』（古典研究会編輯『唐話辞書類集』第十三集、汲古書院、1973年）に「賞錢」という言葉があり、ホウビ、という読みを当てている。

㉔「中夏俗語叢」巻五に、「賞錢」があって、「旌目」と同じ読みであるとの指摘がある。「旌目」の読みは、ヒキデモノとなっている。古典研究会編輯『唐話辞書類集』第十六集、汲古書院、1974年。

㉕『英草紙』第八篇「白水翁が売卜直言奇を示す話」に「賞金」という言葉が使われて、左訓で「ほうび」と読ませている。

㉖『康熙字典』「迎」の項目で、「親迎於涓」を「迎」の発音の説明として引用している。その説明は「凡物来而迎之則平声、物未来而往迎之則去声」という。それから、目加田誠氏はこの四句を「この大邦によき子あり、天の妹にも譬えようか、トして吉祥を得て、親しく涓水に迎えたもうた」と訳している（中国古典文学大系15『詩経』、平凡社、1969年）。「親迎」を親しく迎えるというふうに理解している。このような理解は中国にも見られ、珍しくないようであるが、しかし、私はやはり「親迎」を婚礼の儀式として読みたいのである。白川静氏はこの四句を「大邦の姫君、天乙女とも、礼儀をそなへ、涓水に迎ふ」と訳する（東洋文庫636『詩経雅頌2』、平凡社、1998年）。傾聴すべきであろう。

㉗『類書纂要』（巻九・人事部一）婚姻の項で、六礼について、「『儀礼』云：婚有六礼、一日納采、……、二日問名、……、三日納吉、……、四日納征、……、五日請期、……、六日親迎、父親命子執雁為贄、自往以迎其妻也」という（長澤規矩也編集『和刻本類書集成』、第五輯、汲古書院、1976年）。そして、この六礼の中で親迎は最も重要でかつ煩雑な儀礼である（汪玢玲『中国婚姻史』、上海人民出版社、2001年）を参照。

㉘明の王圻が編纂した『三才図会』「儀制六卷」に「親迎図」があり、その儀式の説明も詳しく掲げられている。

㉙『和漢三才図会』巻第十「人倫之用」の「嫁娶」という条に、「三才図会云、庶人納婦、凡男年十六、女十四以上並聽婚娶。先遣媒氏、通言女氏、許之。次命媒氏納采納幣。至期、婿盛服親迎主婚者礼賓。明日婦見祖祢畢、次見舅姑、往見婦父母」という。「親迎」という言葉が出ているが、親しく迎えるという意味に解する。

㉚宋の陳元靚撰の『纂図増新群書類要事林広記』（乙集巻下・婚礼総叙）に、「近俗、六礼多廢、貨財相交、壻或以花飾衣冠、婦或以声乐迎導、猥儀鄙事、無所不為、非所以謹夫婦、嚴宗廟也」という。にもかかわらず、これに続いて「納采」、「納幣」、「親迎」などの項目を立てている。『事林広記』、中華書局、1999年。

㉛清の趙翼（1727-1814年）が『陔余叢考』（巻四十三）で、「近代俗語、売弄二字、專指誇耀之意。

六朝以前、則謂招攬權勢也」という。『陔余叢考』、河北人民出版社、1990年。

- ③② 古典研究会編輯『唐話辭書類集』第十六集、汲古書院、1974年。
- ③③ 岡白駒『水滸伝訳解』では、「ワカコトヲ自慢スルモ売弄ト云」と「人ノコトヲソタテノボスモ売弄ト云」との両方の意味があると指摘する。古典研究会編輯『唐話辭書類集』第十三集、汲古書院、1973年。後者の意味としては、例えば、『水滸伝』第十四回の「王婆貪賄説風情 鄆哥不忿鬧茶肆」の「我誇大官人許多好處、你便賣弄他的針線」というような使い方があげられる。
- ③④ 長澤規矩也編集『明清俗語辭書集成』第一集、汲古書院、1974年。
- ③⑤ 長澤規矩也編集『和刻本類書集成』第五輯、汲古書院、1976年。
- ③⑥ 古典研究会編輯『唐話辭書類集』第十三集、汲古書院、1973年。
- ③⑦ 古典研究会編輯『唐話辭書類集』第十六集、汲古書院、1974年。
- ③⑧ 同上。「金玉奴」にも「衆巧叫化得東西來時、団頭要收他日頭錢」というように、「日頭錢」が出ている。
- ③⑨ 釈大典『学語篇』巻上「人品類・産業」に、「団頭」の項目がある。古典研究会編輯『唐話辭書類集』第十六集、汲古書院、1974年。
- ④① 程穆衡『水滸伝注略』。馬蹄疾編『水滸資料彙編』、中華書局、1980年。
- ④② 釈大典『学語篇』巻上「人品類・産業」で、「団戸」に「バンタ」の読みをつけている。古典研究会編輯『唐話辭書類集』第十六集、汲古書院、1974年。
- ④③ 古典研究会編輯『唐話辭書類集』第十二集、汲古書院、1973年。
- ④④ その話は次のようになっている。「宋時、杭巧者之長曰團頭、雖富、而巧者之名不除。有一團頭、家富而女甚美、且能詩、心欲嫁士人、人無與爲婚者。有士新補太學生、貧甚、無所避、又得妻之資、羅書而讀、遂登第、授無爲軍司戶。將妻赴官、常不滿於老巧者。一夕、泊舟荒江、其妻已寢、戶強之至馬門觀月、推墜水中。徐呼稍人、此地荒迥、非泊舟處、移泊十裏外。有許某者、爲淮西漕、泊舟司戶棄妻處、見岸上有婦人哭者、乃戶妻也。說墜水時、若有物托吾足者、故得上岸。許亟呼之下船、俾換幹衣、曰：「汝爲吾女。」戒左右勿得言。至官、一日謂僚屬曰：「吾有女、不欲與異、不欲與凡子、欲得一美士贅於家。」衆以司戶薦、許曰：「此子亦吾選中、但其少年入太學、登第、未必肯呼我丈人。」衆曰：「彼寒士、得公收之、如天之福也。」許曰：「諸君自以意爲司戶言之、勿使知出吾意。」衆與之言、戶欣然聽命。入許門、乃故妻也。即唾夫之面、且批其頰、戶驚惶無措、許勸止之。三日後、置酒謂戶曰：「婿常恨岳翁卑賤、今我備員如何？」戶俛首不能答、許待戶如真婿也、女亦盡孝。許死、制重服以報焉。」（卷二十三・委巷叢談）田汝成『西湖遊覽志余』、上海古籍出版社、1980年。
- ④⑤ 古典研究会編輯『唐話辭書類集』第十六集、汲古書院、1974年。
- ④⑥ 古典研究会編輯『唐話辭書類集』第十五集、汲古書院、1973年。
- ④⑦ 伊藤東涯編『応氏六帖』に、「叫化」に「ハチモライ」、「乞食」に「コツシキ」との傍訓をつけている。また「乞食」の解釈は「正花子・乞丐・放化的、郷日乞食。乞丐・叫化、皆求食者。丐夫・丐兒・乞兒。雜俎、京師謂乞兒爲花子」となっている。
- ④⑧ 中国語に「乞頭」という熟語があり、ばくちを打っている場所でピンはねをする人の意味である（『太平広記』巻二百二十八・博戯・「雜戯」や『夷堅志』丁志・「夏氏骰子」などを参照）。お金をもらうという意味で、「丐頭」と重複するところもあるが、違いも明らかである。ちなみに、『応氏六帖』で「乞頭」を「バクチャト」と読んでいる。
- ④⑨ 横山邦治編『読本の世界—江戸と上方』、世界思想社、1985年。

* 討議要旨

井上泰至氏は、白話と一致する言葉でも実はそれ以前から日本人が使っていた常識的な言葉が少なく、当時の日本人にとって本当に珍しい言葉だったかどうかは吟味を要するのではないかと尋ね、発表者は、確かに微妙な点もあるが、資料に挙げたのは原話に使われていることを基準としてピックアップした、と答えた。

大高洋司氏は、日本の研究者は白話小説を普通の漢文の知識とは違う雅文学的なものとして論じてしまう傾向があるが、この30年来、白話小説の研究が進み、白話小説とは非常に俗なものだということが明らかになった。その白話をわざと使って見せ、白話小説を翻案する庭鐘は、原本の卑俗さをどれだけ認識しているのだろうか、と尋ね、発表者は、中国では俗文学と認識されているが、庭鐘がどう認識していたかはこれから課題としたい。マイナスのイメージがなかったとすれば、漢文と並立するものとして白話を意識していたのではないかと答えた。

ロバート・キャンベル氏は、最後にメソッドとしての俗語表現という話があったが、もう少し補足して欲しい、と述べ、発表者は、近世文学とは日本では江戸文学、中国では宋代から清代の文学を指すが、その時代における小説は俗語・口語で書かれていることが大きな特徴であり、近世文学を規定する方法として、口語で書かれていることをメソッドとして強調したい、と答えた。

神野藤昭氏は、中国の文学史・歴史における時代区分の問題について質問した。